Title:「昼下がりの太陽たち」

佐藤　健太郎
1982年5月7日生まれ。身長180cm。体重80kg。
2004年、日本写真芸術専門学校に入門。
2006年「強くなりたい」と海外遠征を決意。彼にとっては結果が求められる遠征となるだろう。

最近のエントリー

- 僕と健三の戸惑い (2006.03.31)
- 弱牡監禁ホテル (2006.03.26)
- 旅の始まり　孤独な映画館 (2006.03.26)

アーカイブ

- 2007年03月
- 2007年02月
- 2007年01月
- 2006年12月
- 2006年10月
- 2006年09月
- 2006年08月
- 2006年07月
- 2006年06月
- 2006年05月
- 2006年04月
- 2006年03月

投稿カレンダー

カテゴリー一覧

ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校 NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

RSS 2.0

昼下がりの太陽たち > 2006年03月 アーカイブ

06.03.31

僕と健三の戸惑い

Tweet　いいね！ 0　チェック

ホテルのテレビ、Zチャンネルで夜ごと日本のプロレスが放映されている。Zチャンネルとは、なんとも潔いチャンネルではないか。プロレスを横目に腕立て伏せをすると、上腕二頭筋の繊維がビクリビクリと鋭く反応する。ただ、試合のチョイスはどこかおかしい。三沢―川田、ハアッ、ハアッ、往年の全日本。続いて、ジャンボ―小橋、ハアッ、ハアッ。暴れん坊将軍をはさんで、次は、棚橋―健三。健三。スズキケンゾー。ハあっ、はあて？こともあろうに健三がマイクを取った。「ちゃんと喋れー」という野次。さもありなん。ふと、本郷先生の言葉を思い起こした。「自分の存在を観念の内におさめるならば、社会では死しかない。自分に立ち向かう責任を持て！」と。容易に実行できる言葉ではない。唐突だが、無粋な僕には本郷先生が辞職したわけがわからない。明らかにしなければならないことは無数にある。ムルソー予備軍の僕は、勿論、自らが理性で決めた原則を持たず、なおざりを好む。リングの上でも、学内でも、台湾珈琲店の喧騒の中でも、それは許されない。「日本人かー何しに来たー」マスターは日本語で言った。気がつけば、店の客が両膝を激しくゆすって僕を煽りたてる。群衆が野次馬になる風景。たぶらかすように紙コップいっぱいの珈琲が出てきた。赤面してしまう。しびれるほど熱く、酸っぱい珈琲。彼らにはわかるのだろうか？

カテゴリ：
post by 佐藤　健太郎 | 日時: 2006.03.31 | パーマリンク

昼下がりの太陽たち > 2006年03月 アーカイブ

06.03.26

弱牡監禁ホテル

Tweet　いいね！ 0　チェック

船酔いの名残か、気分がすぐれない。石垣島改めウサンクサイ島の島人、海人たちに観光客として巧みに利用されたまま、ステロタイプとしてフェリーに乗船したせいか。台湾の道行くバイクや車が挨拶のしるしとして、僕の顔に生温い排気ガスを吹きかけるせいか。身体の苦しみは自尊心を誤魔化してくれるだろうと、ホテルに隠って腕立て伏せを始めた。平静にかえるまでには、もうしばらく時間がかかりそうだ。

カテゴリ：
post by 佐藤　健太郎 | 日時: 2006.03.26 | パーマリンク

昼下がりの太陽たち > 2006年03月 アーカイブ

旅の始まり　孤独な映画館

Tweet　いいね！ 0　チェック

よろずこの研修は今のところ休暇だ。ただ道を歩いているだけで、三線の音色が聞こえ、ほろほろと黒や白の蝶が舞い出でて、ハイビスカスが咲き乱れる。潮まじりの汗を拭って、そういえば今日は何曜日だろう？島人、海人、楽園のオンパレード。こうやって僕は過去を誤魔化す。知らんぷりん。そんな僕ってトテモキモイ。装いやがって。

とにかく、太陽が眩しいので、島にひとつの映画館へ行った。スクリーン上でライオンが死んだり甦ったりしているうちに、「まだあります」後方から男の声が聞こえた。見ると闇の中でひとつの人影が入り口を塞いでいる。ああ、あの姿形は確か、上映前に映写室にいた中年の、きっと映写技士。扉の前でベルボーイの如く立ち通して、棒立ちのアベックを遮っている。映画はエンドロール。アベックは寄り添ってもとの席につく。横長英字のエンドロール。ちらちらとアベックは後方の闇の男に目をやる。そんな事態を僕はせせら笑う。この劇場には4人のみ。そのうち客は、おそらく3人。ディレクター、嫌らしいほど御立派な英字がスクロールして、ほんのひととき暗闇に、にわかに明るくなった。アベックと僕が振り向くと、扉の前に人影はなかった。石垣シネマのこれがルール。スクリーンに映し出された多様な情景の他に、この劇場では、たとえ「この国には100年間も春が来ないんだー」なんてセリフをさらりと使う矛盾まみれの痛快ディズニー映画であろうとも、観客の胸裡に湧いて当然であろう途中退出希望の意思を、体を張って拒否される。それだけの覚悟を僕は持たない。それだけの構造を僕は見ようとしない。覚悟はあるか？お前は何も知らないだろう？なんて、面と向かって言われた気がした。気のせいかな？僕は席に蹲る。気のせいかな？とりあえず今日のところは。誰も居なくなるのを見計らって席を立つ。足の裏にびちょり、汗をかいていた。逃げろー！

カテゴリ：

post by 佐藤　健太郎 | 日時: 2006.03.26 | パーマリンク

Copyright 2007 All rights reserved NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE　powered by OLYMPUS